

News Letter No. 55

22年1月27日(水) 発信

Sato Project

Sato Project

農業が環境を破壊するとき —ユーラシア農耕史と環境—
「里」プロジェクト

お問い合わせ

総合地球環境学研究所佐藤プロジェクト (加藤早稲子) e-mail: sato@chikyu.ac.jp

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山 457-4 Tel:075-707-2384 Fax:075-707-2508



倒木の上で成長した木
エクスカーションでたずねた九州大学宮崎演習林にて (撮影: 鞍田崇)

第3回焼畑サミット in 大分

原田信男 (国士舘大学 21世紀アジア学部)

第3回焼畑サミット in 大分

原田信男（国士舘大学 21世紀アジア学部）

ここ数年、焼畑サミットは、焼畑という初源的な農法の意義を見直すなかから、佐藤プロの本来の「農業が環境を破壊するとき」というテーマに迫るべく、研究者のみならず焼畑の実践者や一般市民とが協同で、もともと農はどういうもので、どうあるべきか、を考えようとする目的で開催されている。いわばその準備段階にあたる2005年の島根県での「中山間地域における持続的な土地利用シンポジウム」を承けて、第1回目の高知、第2回目の鶴岡に次いで、今回、第3回目を大分で実施することができた。

2009年度は、11月13日（金）に大分市のコンパルホール1Fの文化ホールで、地元大分大学との共催という形で実現をみた。これまでは、高知では椿山、鶴岡では藤沢など、現在も焼畑を行っているところで、焼畑を中心に議論を展開してきたが、今年は焼畑や山焼・野焼に留まらず、広く中山間地域における農業の問題を扱うこととした。そして「よみがえる『農』と暮らしのかたち」というテーマを設定し、地元の大分県や大分大学などのメンバーを交えて、活発に情報や意見の交換が行われた。

そうした事情から、今回はテーマの幅が例年以上に広がったため、全体を3部構成とした。まず第1部は基調講演で、「九州山地の焼畑民俗」と「火のある暮らしが新しい」という講演が行われ、これを承けて「火と現代の暮らし」というテーマで座談会が催された（写真1）。古くから火は、循環と再生というバランスを繰り返すために、最も重要な道具の一つであったが、現代の暮らしでは、火が見えないという状況にあるという指摘は傾聴に値しよう。



写真1：焼畑サミット風景

また第2部では、「山がよみがえる、山とよみがえる」と題して、実際に焼畑を試みられたり、山焼きに従事されている方たちの苦労話や喜びのほか、実践的な研究者からも、そうした活動の現状や問題点などが報告された。

そして第3部は、シンポジウム「大分発：いま再生される農と暮らしのかたち

ち」で、「これからの大分の農がめざすもの」「柚子を用いた過疎地域の再生モデル」「森林・草原を生かすこと」といった問題提起があり、それぞれの地域に応じた農の取り組みの実例が紹介された。さらに、これを承けて、農の問題に取り組む大分および全国からのパネリストたちが、今後の農の在り方について、熱心なディスカッションが行われた。とくに中山間地帯においては、過疎化が進み、地域経済が崩壊に向かいつつあるなかで、どのような対応策があるのか、農や地域交流および地域の経済発展に関わる実践者のほか、行政側や研究者などが、それぞれの立場から意見を述べあったが、現在ではまだまだ問題点が多いというのが正直な感想であった。

なお毎年、焼畑サミットに前後して行われるエクスカージョンは、今回はまさに焼畑地として名高い宮崎県の西米良と椎葉を訪れた。西米良では、那須末五郎さんの米良ダイコンの焼畑（写真2）、椎葉では椎葉英生さんのソバの焼畑（写真3）を見学したが、ともに



写真2：西米良の焼畑ダイコン

シカの食害によって全滅しており、かろうじて米良ダイコンが少量とれたが、獣害が極めて難しい問題であることが実感された。なお焼畑のほか、那須久喜



写真3：荒らされたソバの焼畑（椎葉）

さんのミツバチ栽培やイノシシ飼育を見学したが、人の知恵と行動によって、自然界の一部を“山の幸”という恵みに変えることの大切さを、改めて思い知らされた気がした。